

看護職として放射線を学ぶこと ——福島・長崎・ロシアでの経験から—— Significance of learning radiation as a nurse

佐藤 奈菜

Nana SATO

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 災害・被ばく医療科学共同専攻

Division of Disaster and Radiation Medical Sciences Joint Major Nagasaki University
Graduate School of Medical Sciences Master Course

私は現在、長崎大学大学院で放射線と災害について学んでいる。きっかけは、高校生の時、福島県で東日本大震災を経験し、その後の県外での看護学生時代に偏見や風評を実感したことから、正しい放射線の知識を学びたいと思ったことである。この度、長崎大学が申請した平成29年度文部科学省「大学の世界展開力強化事業—ロシアとの大学間交流形成支援」の事業が採択され、その事業の一環としてロシア連邦の北西医科大学等で行われたワークショップ「Population health protection」に学生として参加した。

この事業は、日露の大学間連携によって、災害・被ばく医療科学分野における日露両国および世界の専門家を育成することを目指しており、32年前にチェルノブイリ原子力発電所による被害を経験した北西医科大学をはじめとするロシア連邦およびベラルーシ共和国の大学並びに研究機関と、7年前に東京電力福島第一原子力発電所事故を経験した福島県立医科大学および長崎大学が連携し、世界的にも人材が不足している災害・被ばく医療科学分野の専門家育成に取り組んでいる。

私が参加したワークショップは2018年1月、ロシアのサンクトペテルブルクで4日間に渡って行われた。前半は北西医科大学で、後半はチェルノブイリ原子力発電所事故後の対応と線量評価で中心的な役割を果たしたResearch Institute of Radiation Hygieneで行われた。講義では、チェルノブイリ原子力発電所事故当時、一般の住民と専門家間に放射線に関する認識の乖離があり、住民は有事の際に放射線について正しく理解するのは難しいということを学んだ。福島で得られた知見はチェルノブイリですでに起きていたと知り、国を超えて経験を生かす必要性があると感じた。

また印象的だったのは、北西医科大学の学生との交流の中で、放射線が特別なものと思われていないことである。私は福島県外での経験から、日本の外でのセミナーを恐れる気持ちがあった。しかし、私がこのワークショップ中に差別を受けることはなく、背景には教育があると考えられた。日本では医療従事者、とりわけ看護職は、学生の間に放射線について学ぶ機会は得られにくい。日本でも30年後、医療を学ぶ学生が、放射線をただ怖いものではないと答えられるようになっていればいいと思った。

これまでの経験と学びから、私は看護職が放射線を学ぶ必要性を感じている。福島で一住民として経験したこと、長崎という歴史ある街で過ごし学ぶ中で感じたこと、また今回の海外で得た学びを今後に生かしたい。

doi: 10.24680/msj.7.1_52